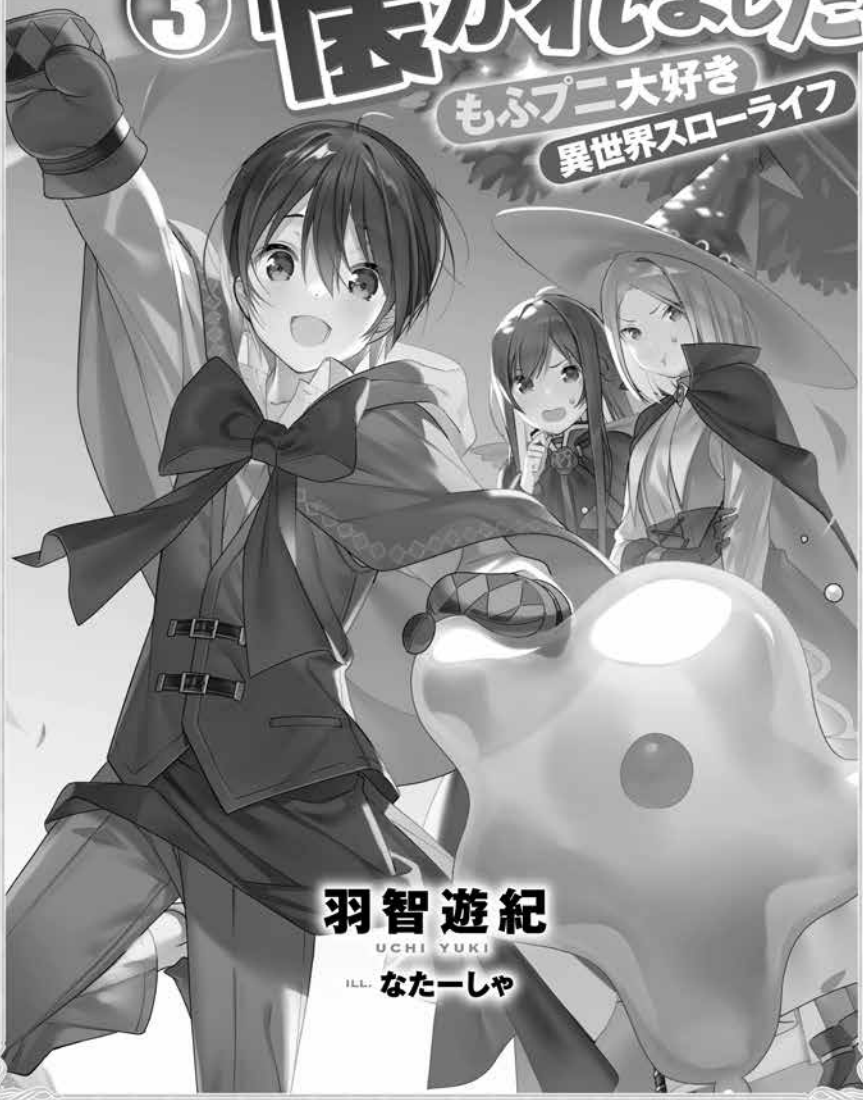
魔物をお手入れしたら懐かれました ③

もふプニ大好き異世界スローライフ



羽智遊紀
UCHI YUKI
ILL. なたーしゃ

フェイ
魔王四天王の一人で「火」を司っている。
魔王とは幼馴染の友達。
目下婚活中。
和也（かずや）
生き物が大好きな青年。
手にした特殊能力
「万能グルーミング」で
異世界中の魔物を手なづける。
クリン
魔王四天王の一人で
「水」を司っている。おっとりした
性格（？）の天然キャラ。
カウィン
魔王四天王の一人で
「風」を司っている。
魔王軍きっての武闘派。
マリエール
魔王。歴代最強と
言われる実力を持つ。
スラちゃん1号
和也のことが大好きなスライム。
炊事洗濯からバトルまで、
なんでもこなす。

❖
❖
❖

魔王城に招待された、もふもふプニプニ大好き青年・和也。

魔王領の砦を訪れ、そこを治める狼族の司令官と犬狼族の副官との結婚式をなぜかプロデュースした彼は、スラちゃん1号、「無の森」の魔物達、新たに仲間になった馬の神獣スレイプニルのホウちゃん、リザードマン、蜂の魔物のキラービー、砦のそのほかの魔族達とともに――寄り道ばかりしていた。

いっこうに魔王城に向かう気のない和也を魔王マリエールが見たら――

「なにしているの⁉　こっちはずっと待っているのよ！」

と叫んだであろうが、幸いなことに和也が魔王城に向かう用事があるのを知る魔王領関係者は、この場にほとんどいなかった。

砦の司令官と副官は知っていたものの、二人は幸せオーラ全開で砦のほかの者にそのことを伝えていない。

ちなみに、副官の一族である犬狼族達は和也のグルーミングの虜になり、和也が旅立たないこと

をむしろ喜んでいた。
そんなふうにしてみんなが幸せに満ち溢れ、和也と無の森の魔物達はさらなる混乱の渦を生みだしていくのだった。

1．あれ、まだ出発してないの？

「ふはははは―。待てー逃がさないぞー」
「はっはっは。犬狼族の長老たる者がそう簡単に捕まるとでも？　甘いですぞ。それでは犬狼族の名が泣きますからな」
砦の牧場で、和也と犬狼族の長老が追いかけっこしている。
相変わらず「え、なにやってんの？　まだ魔王城に向かわないの？」とツッコミを入れたくなる状況である。
走り回る和也達から少し離れた場所では、スラちゃん1号が微笑みを浮かべながら、朝食の準備をしていた。
和也達がなぜこの砦にまだいるのかというと――犬狼族にお願いしていた山牛が来るのを待っているのである。和也はその山牛の乳でプリンを作ろうとしていたはずだったが、そのことはすっかり忘れていた。
和也が長老を捕まえると、長老は嬉しそうに言う。
「わふー。捕まりましたなー。逃げも隠れもしませんぞ。思う存分してくだされ！」
「ふはははは―。我に挑むとは千年早かったなー！　我が腕に抱かれ、眠るがよいぞー。いでよ！万能グルーミング！　我が力を思う存分味わえー」
和也はそう言ってブラシと霧吹きを作りだし、長老の全身をくまなくお手入れしていく。
長老は、和也のブラッシングに身を委ね、しばらくすると寝息を立てはじめる。
「今回も俺の勝ちだね。それにしても長老さんのお髭って気持ちいいよねー。触っても飽きないし、サラサラだし、気持ちいいし！　長老さんが気持ちよさそうに寝ているのを見ていたら――ふわぁぁぁ、俺も眠くなってきたなー。ちょっとだけ眠ろうか……な……」
和也は大きくあくびをすると、そのまますぐに長老につられて眠ってしまった。そこへスラちゃん1号がやって来る。
触手の動きだけで意思を示せるスラちゃん1号は「あらあら、和也様ったら。こんなところでお休みになるなんてお可愛いこと」と表現するように触手を動かした。
続けて、「犬狼族の長老さんは起きてくださいね。このままだったらほかの者達に恨まれます

よ」と、犬狼族の長老を優しく起こす。
「……ん？　んあ!?　し、失礼しました、スラちゃん1号様。和也様のグルーミングは心地よすぎて、年寄りには耐えられないようですな。ほっほっほ」
長老はそう言うと、頭をガシガシと掻いて苦笑を浮かべた。
それから、長老は和也を起こさないようにゆっくりと立ち上がり――遠くでイーちゃん達犬獣人が羨ましそうに見ているのに気づいた。
犬狼族の長老は急いでイーちゃん達のもとへ走り寄り、申し訳なさそうに頭を下げる。
「ハイドッグス一族の皆様を差し置いて、私一人だけ申し訳ございません。しかし、和也様からご指名をいただいておりますのでしばらくご辛抱ください。それに、もうすぐ山牛もやって来ましょう。そうなれば和也様も旅立たれ――え？」
「きゃうきゃう！　きゃうぅぅ！」
長老の謝罪に、イーちゃん達は「気にしないで」と尻尾を振る。
犬獣人はハイドッグスとも呼ばれ、長老達の犬狼族の遠い親戚に当たる。もともと犬狼族は無の森に暮らしていたが、魔王領に移り棲んだのだ。
なお、ハイドッグス一族と犬狼族の見た目は似ているが、その体毛の質は微妙に違う。ハイドッグス一族はふわふわした感じだが、犬狼族は硬めであった。

「イーちゃん殿は心が広い方ですな。我が犬狼族は、和也様だけでなくイーちゃん様率いるハイドッグス一族にも従いますぞ」
感激した犬狼族の長老はそう言うと、腹を見せて寝転がり、臣従の意思を示した。
それを見たイーちゃんは楽しそうに鳴いて、一緒にお腹を見せて転げ回る。
二人の様子を遠巻きに見ていたハイドッグス一族と犬狼族が集まってくる。彼らは皆腹を見せて転がり、そこにネーちゃん率いる猫獣人も参加し……
「ふわぁぁぁぁ。よく寝たなー。え？　なに、この光景？」
和也が目をこすりながら起きると、そこには桃源郷があった。
右を見ても左を見てもモフモフで溢れており、すべての者が楽しそうに転げ回っている。
和也が目覚めたことに気づいたモフモフ達が、歓声を上げていっせいに近寄ってくる。和也は、飛びかかってきたイーちゃんを捕まえると高らかに言う。
「ふぉぉぉぉ！　なにこれ？　わっぷ！　ちょっ！　舐めないでよー。わ、こら。だめだって。そんな悪い子達はお仕置きするぞー。いでよ！　万能グルーミング！　まずは誰からだー。捕まえたー。イーちゃんからだぞー」
「きゃふー。きゃうきゃう！」

高速グルーミングでイーちゃんを一瞬でつやつやにした和也は、次にネーちゃんを捕獲した。
「今度の悪い子はネーちゃんかー。ほかにも俺に挑もうとする者達には……秘技！　高速グルーミング乱舞！」
和也は謎の技名を叫びながら勢いよく走りだし、捕まえた者を慣れた手つきで次々とグルーミングしていく。
こうして、犬獣人、猫獣人、犬狼族と総勢百匹近くを捕まえた和也は、幸せな時間を存分に満喫したのだった。

2．そして山牛が到着してしまう

「おほほほほほー。今日も元気にグルーミング日和ですわよー。逃がさないでございますわー」
「きゃふふふふー」
「にゃぁぁ！」
「きしゃー」
いつの間にやら牧場は、砦の魔物やイーちゃんやネーちゃんやリザードマン達を、和也が追いかけ回す場と化していた。
なぜかお嬢様言葉の和也はさておき――
砦の司令官が、そんな光景を羨ましそうに見ている。
「くっ！　俺がグルーミングしてもらえる順番は明日か」
「はいはい。明日まではしっかり仕事してくださいね、司令官」
うなだれる司令官を、副官が慰めるのだった。

和也達が遊んでいる間、じつは狩りに行っていたホウちゃんとちびスラちゃんが戻ってきた。ホウちゃん達が、狩りの成果をドヤ顔で報告をしてくる。
「ひひーん」
「ん？　おお！　ホウちゃんとちびスラちゃんでお肉を獲ってきてくれたの？　最高だよ！」
解体が済んだ状態のお肉が和也に次々と手渡されていく。
ちびスラちゃんの説明では、そのお肉はイノシシに似た魔獣のもので、散歩中に群れで襲ってきたらしい。それで、イラッとしたホウちゃんがすべて倒したとのことだった。
「すごいね！　今日はホウちゃんとちびスラちゃん祭りだね！　いでよ！　万能グルーミング！流れるような動きでご褒美グルーミングでございますわー！」

「ひひっ！　ひひーん」
和也はブラシを作りだし、絶妙な力加減でホウちゃんのブラッシングをはじめる。
スラちゃん1号が作ってくれたマッサージクリームを、毛に沿って円を描くように塗りつけ、さらに流れるような動きでブラッシングしていく。
「ふはははは―。気持ちいいじゃろ！　身体がふやけるような感じであろう。我の力を存分に味わうがよいぞー」
「ひひーん」
あまりの気持ちよさに八本足で立っていられなくなったホウちゃんは、崩れるように横たわった。そうして、和也がグルーミングしやすいように体勢を変える。完全に警戒を解いたその姿には、神獣の威厳はなかった。
ちびスラちゃん達が、ホウちゃんに乗っかりはじめる。
「んん？　ひょっとしてちびスラちゃん達もお手伝いしてくれるの？　なんていい子なのだろうか！　よし！　じゃあ、ホウちゃんにクリームをまんべんなく塗りたくってくれたまえ。ミッションアタック！」
和也の強引な指示に従い、ちびスラちゃん達はクリームをホウちゃんに塗っていく。その作業を終えると、彼らは蹄鉄のメンテナンスまではじめた。ミスリルで作られている蹄鉄はきれいに洗われ、蹄にもクリームがしっかりと塗り込まれていく。
ホウちゃんは、いつの間にか眠りについていた。
そんな様子を、砦の魔族達が驚愕の表情で眺めている。
「スレイプニル様が眠ってるぞ」
「神獣は眠らないと聞いたが……」
「それそれ！　俺も聞いた！」
「でも、ホウちゃんさんは気持ちよさそうに寝ているぞ？」
「和也様のグルーミングがすごいという証明だな」
騒然となる一同。
和也はそれに気づくことなく機嫌よくグルーミングを続ける。ちびスラちゃん達も甲斐甲斐しくサポートしていた。
そこへ、犬狼族の長老がやって来る。
「和也様。山牛のつがい五十組と、仔山牛十頭が到着したとのことです」
「おお！　ついに山牛さんの登場だね！　よし、一気にグルーミングを終わらせるぞ！　うなれ、俺のゴッドハンド！　燃え上がるように動かせ神速ブラシ！　うりゃぁぁぁぁ！」
山牛が届いたと聞いてテンションが振りきれた和也は、謎の必殺技名を叫びながらホウちゃんを

仕上げていく。
ホウちゃんは和也の手の動きが変わったことに驚き目を覚ましたが、先ほどとは違う気持ちよさに再び眠りに落ちた。
スラちゃん1号がやって来て「お疲れ様です、和也様。山牛を迎えに行く前にお茶でもどうぞ」と和也に紅茶を手渡す。
「ありがとうー。やっぱりホウちゃんは大きいし、脚が八本もあるからやりがいあるよねー。ちびスラちゃん達も手伝ってくれたから技術の幅も広がったよ！　よし、じゃあ山牛さん達を迎えに行こう。スラちゃん1号も一緒に行くよー」
勢いよく紅茶を飲み干した和也は、スラちゃん1号を頭の上に乗せ、山牛のもとに向かった。

❖　❖　❖

和也は、山牛をホルスタインかジャージーのような牛だとイメージしていたが、彼の目の前で草を食べているのは、長毛種の牛であった。
和也は山牛を見て、ワナワナしはじめる。
そんな和也を見て、犬狼族の長老が不安そうに尋ねる。

「あ、あの。なにか気に障りましたかな？　選りすぐりの山牛を用意させていただいたのですが……」
和也は首を横に振って答える。
「違うよ！　こんなモフモフした毛の牛がいるなんてビックリだよ！　これはグルーミングのしがいがありますぞー。ねえ、スラちゃん1号、山牛さんの体毛がつやつやになるクリームを作ってくれる？　樽いっぱいに欲しいな」
スラちゃん1号が「かしこまりました。そのほうが搾れる乳の量も増えそうですね。そうですよね？　山牛さん達」と触手で伝え、近くの山牛の顔にゆっくりと触手を這わせる。
怯えた山牛達は、「もー」と鳴いて何度も頷くのだった。

3．ほのぼのとした一幕

「ふはははは―。グルーミングは気持ちいいでしょ！　わかるよ、わかる！　でもこれからが本番なんだ。うりゃぁぁぁぁ！」
「もー」

和也がブラシを動かすと、山牛は気持ちよさそうに鳴いた。
続いて和也は、スラちゃん1号が用意してくれたつやつやクリームを山牛に塗り、手慣れた動作で馴染ませていく。
グルーミングする和也の側には、山牛達が待ちきれないとばかりに行列を作っていた。その光景を見て、犬狼族の長老はギョッとした表情になっている。
そんな犬狼族の長老に、背後から司令官が声をかける。
「山牛が行列？　御するのに苦労する山牛達が？」
「おお、婿殿か。いや、和也様がグルーミングをはじめると言って一体にブラシを入れた瞬間……行列を作りはじめたのじゃ」
「なんでそんなことに？」
長老と司令官の会話に、副官が参加してくる。
「どうやらちびスラちゃんさん達が誘導しているようですよ」
彼女はそう言うと、山牛の頭の上を指さした。
それぞれの山牛の頭の上には、ちびスラちゃんが乗っていた。ちびスラちゃん達は触手を動かし、山牛が効率よくグルーミングを受けられるようにしているようだった。
なお、大人の山牛と一緒に来ていた仔山牛は、スラちゃん1号がまとめて面倒を見ているらしい。

司令官が犬狼族の長老に尋ねる。
「仔牛に近づくと見さかいなく攻撃してくる凶悪な山牛が……スラちゃん1号殿がなにかをしたのか？」
「いや、婿殿。和也様がリーダー格の山牛にブラシを入れた瞬間に、なにやら山牛達が鳴きはじめ、それを聞いた仔牛達がスラちゃん1号殿のもとに集まったのじゃ」
「な、なるほど？　よくわかりませんが、なるほどと言っておきますよ」
司令官は、長老の話を聞いても理解できなかった。副官から理解するのを諦めるように目で伝えられた彼は、大きくため息をついて現状を受け入れる。
それから司令官は軽く頬を叩いて、和也に近づく。
「和也殿」
「おお！　司令官さんと副官さんじゃん。どう、新婚生活は？　ちょっと待ってね。うりゃぁぁぁぁ！　万能グルーミング千手観音！　この子は終わりー。ちびスラちゃん、あとはよろしくー。ちょっと休憩するから、グルーミングをしてない子はちびスラちゃんを頭の上に乗せたままにしておいてねー」
和也は、山牛のグルーミングをいったん休憩することにした。
グルーミングを受けた山牛は感謝の気持ちで和也に身体をこすりつけ、まだの山牛は残念そうに

しながらもその場で草を食べはじめた。
和也は司令官に尋ねる。
「どうかしたの？」
「い、いえ。山牛が言うことをよく聞いているなと」
「犬狼族の長老さんから、山牛は気難しいと聞いていたけどみんないい子だよ！　子供も可愛いしさ。こんなにいい子達なら飼育するのも楽だよね。まあ俺が飼育するわけじゃないから、司令官さん達に頑張ってもらう感じだけど」
和也の言葉に司令官が困惑していると、仔山牛の世話をイーちゃんに引き継いだスラちゃん1号がやって来た。そして、「お疲れ様です、和也様。飲み物を用意しますが、ご希望はありますか？」と触手の動きで確認してくる。
「炭酸ジュースかな」
スラちゃん1号は慣れた手つきで果物をすり潰し、炭酸水を入れてかき混ぜる。そしてどこから用意したのか、グラスに氷まで入れて和也に手渡した。
「くー！　美味い！　仕事のあとの炭酸は最高だね。さすがはスラちゃん1号だよ。おかわり！」
和也にそう言われ、スラちゃん1号は「はいはい。すぐに用意しますよ。皆さんもいかがですか？」と次の一杯を用意し、その場にいたみんなに炭酸ジュースを勧めた。

それから、和也、司令官、副官、長老、砦の魔族、犬獣人、猫獣人、和也の護衛をしている魔族とリザードマンなど様々な種族が入り交じり、ちょっとした宴会がはじまる。
和也は集まったみんなに向かって告げる。
「だったら、このままバーベキューでもしよう！　いいよね。スラちゃん1号？」
スラちゃん1号は「あらあら。でも、山牛達のグルーミングが終わってからですよ。おあずけをされている子達が可哀想ですからね」と上下に弾みながら答えた。
「そっかー。そうだよね。まずは仕事を終わらせないとだね。じゃあ、それが終わったらバーベキューをしよう！　さあ、俺の休憩は終わり！　皆はそのままジュースを飲んどいてよ」
おかわりの炭酸ジュースを飲み干した和也はそう言って大きく伸びをすると、山牛達のグルーミングをすべく走っていった。
司令官は山牛を手なづける方法を聞きたかったのだが……勢いよく去っていく和也を止めることができず、残念そうな顔をするのだった。

4．和也はなにかに気づかされてしまう

和也が砦に到着してから、なんと一ヶ月経った。

砦の牧場では、山牛の搾乳が行われていた。

さらには、山牛の乳を材料にした料理が和也によって開発され、スラちゃん1号がレシピとして取りまとめている。

「今日は、先日完成したチーズを使いますー。スラちゃん1号、チーズを使った面白い料理があるんだよー。チーズフォンデュといって、チーズを削ってワインで溶かしていくんだけど……」

和也が言い終える前に、スラちゃん1号はチーズフォンデュを作ってしまった。

「すごいねスラちゃん1号！　……でも、アルコールが苦手だからなんとかならない？」

和也が申し訳なさそうに付け加えると、スラちゃん1号は「わかりました。アルコールが苦手な方用のチーズフォンデュもあとで作りましょう」と触手で伝える。

それからスラちゃん1号はちびスラちゃん達に向かって「ちびスラちゃん、このワイン入りチーズフォンデュは司令官さんのところに。一緒にパンや野菜とベーコンも忘れないようにお願いしますね」と指示を出す。

ちびスラちゃん達は器用に身体を凹ませて鍋を受け取ると、パンなどが入った籠と一緒に司令官のもとへ運んでいった。

その間に、スラちゃん1号は新たな鍋に新しいチーズフォンデュを作る。今度はアルコールが入っていない。

「うんうん、これこれ！　さっきはお酒っぽさを感じたんだよね。俺って子供舌だよなー。美味しく食べられるなら子供舌でもいいけどねー」

和也がアルコールなしのチーズフォンデュを食べて笑みを見せると、スラちゃん1号も嬉しそうにするのだった。

そんなふうにのんびりとしていると、司令官が顔面蒼白で走ってきた。和也は食事をいったんやめて尋ねる。

「どうしたの？　ちびスラちゃんに届けてもらったチーズフォンデュ、美味しくなかった？　ワインの量が多かったかな？」

「いえ、じつに美味しい料理でした。あのような料理を食べられるのは本当に幸せです。可愛い嫁さんを見ながらの食事って最高ですよ。和也殿には本当に感謝……じゃなくて！　いや、感謝して

いるのは本当ですが、和也様、そろそろ出発しないとだめです！」
司令官に一気に話され、和也は首をかしげる。
「え？　出発？　まだ山牛の乳を使った料理が残っているのに、無の森に帰るの？」
司令官は慌てて手を横に振って声を上げる。
「違いますよ！　魔王城です！　魔王城に向かうんですよ！　魔王マリエール様に会う約束をお忘れですか⁉　帰らないでください。文字通り俺の首が飛びます！」
「忘れてた！　そういえば、マリエールさんとお話しするために無の森を出たんだった。スラちゃん1号は覚えていたの？『え？　当然、覚えていますよ』だって？　なんだよー教えてよー。スラちゃん1号は俺の秘書さんなんだよ」
スラちゃん1号は「あらあら。いつの間にやら秘書になっていたのですね。ただ、あまりにも和也様が楽しそうにされていましたので、マリエールくらい待たせてもよいかと思いまして」と澄まし顔で身体を動かした。
司令官は泣きそうになった。スラちゃん1号からとんでもない言い分を聞かされたからである。
ちなみに、司令官自身もすっかり忘れていた。
だが、チーズフォンデュを食べていたところ四天王筆頭（してんのうひっとう）フェイから「定時連絡以降、和也殿の行方（ゆくえ）がわからない。なにか知らないか？」との連絡を受け――「ぬぁぁぁぁ！」と叫んで、慌てて

和也のもとにやって来たのである。
司令官が和也に、魔王マリエールと四天王筆頭フェイが心待ちにしていると力説すると、和也は勢いよく頷いて立ち上がった。
「そうだ。待たせちゃだめだよね。でも、いい感じのチーズがたくさんできそうなんだよなー。ネーちゃんと、ちびスラちゃん達が頑張ってくれているからね。スラちゃん1号、できかけのチーズを運んでも大丈夫かな？」
スラちゃん1号は「たぶん問題ないですよ。ちびスラちゃん達に頑張ってもらいましょうね」とチーズ作成担当のネーちゃんを呼び、荷台に積み込むように指示を出すのだった。

急に出発の準備をはじめた和也達を見て、砦の魔族と犬狼族達が悲しそうな顔になっていた。彼らはすでに和也に心酔（しんすい）しきり、別れが受け入れられないのだ。
「俺達もついていきます！」
「それを言うなら、犬狼族は和也殿にも忠誠を誓っておりますぞ！」
「なんだよ。俺達が最初に和也さんを見つけたんだぞ！」
「最初にグルーミングしていただいたのは儂（わし）じゃ」
「副官ちゃんが先だろうが！」

「なにを言うか！　やろうって言うのか！」
なぜか一触即発状態の砦の魔族と犬狼族。
乱闘騒ぎに発展しそうになるのを見て、和也が間に入る。
「俺のために争うのはやめてほしいなー。俺達は出発するけど、また戻ってくるから！　それまでに、ヨーグルト、チーズ、バターをいっぱい作って待っていてよ。その前に、一時のお別れのグルーミング祭りだー」
和也の言葉に泣きそうになっていた者達は、「グルーミング祭り」と聞き、大歓声を上げて和也に群がるのだった。

5．和也は旅立つ

「もー」
「和也様！　早く帰ってきてくださいね！」
「山牛の飼育はお任せください！」
「チーズを大量に作って待ってますよー」

翌朝、出発前の和也のもとに山牛をはじめとして大勢の者が集まっていた。
一人ずつではなくいっせいに話しかけられ、和也がさすがに困惑していると、その言葉の中に爆弾発言が放り込まれる。
「私の子供にグルーミングしてくださいねー」
副官のその一言で、見送りの場が修羅場と化す。
「こ、子供？　なにー！」
「嘘だー副官ちゃん！　子供ができたなんて嘘だと言ってくれ！」
「司令官許すまじ！」
「マジ倒す！」
その場にいた司令官が後ずさりしながら口にする。
「ちょっ！　待て！　話せばわかる」
「わかるわけねー！　野郎ども、やっちまおうぜ！」
「「おー」」」

❖　❖　❖

先ほどまで和也が旅立つのは嫌だとバリケードのように前を塞いでいた魔族達が、今は司令官を追いかけ回している。
そんな様子を見て唖然としていた和也だったが、ふと思いだしたように副官に確認する。
「さっきの話だけど――」
「ふふっ。申し訳ございません。あのままでは和也様が出発できないと思いまして」
小さく舌を出しながらそう答える副官。
和也は納得したものの、殺意を向けられ追いかけ回されている司令官を見て、少しだけ申し訳なく感じる。
「司令官さんは大丈夫？　ほら、あの人なんて抜剣までして追いかけているよ？」
「彼は実力がありますから大丈夫ですよ。この程度で倒されるような人じゃないです。それに、お父さんとして強くあってほしいですからね」
そう言って少し頬を赤らめながらお腹をさする副官。スラちゃん1号が「あらあらまあまあ」と触手を動かすと、和也は手を叩く。
「さっきのは嘘じゃなくて本当だったんだね。じゃあ、なにかあったら大変だね！　前に作ったお守りをあげるよ！　スラちゃん1号、あれまだ残っていたよね？」
スラちゃん1号は「ええ、ありますよ。どれにします？」と、ネックレスを取りだす。

ネックレスには大きな宝石が付けられていた。魔力を感じ取れる者には、石自体が光っているように見える不思議な宝石である。
「うーん、そうだなー。これにしようかな？　いやこっちがいいかな？　……よし、全部あげるよ。そのときの気分で変えてくれていいから！」
和也から五種類のブレスレットすべてを渡された副官は、青白い顔になっていた。
遠慮しよう、全力で遠慮しよう、そう思った副官だったが、スラちゃん1号から「和也様からの下賜を断るのですか？」と無言の威圧を受けて観念した。
「だ、大事にさせてもらいます。家宝としますね」
「そんなすごい物じゃないから気にしなくていいんだよー。えっと、透明なのは着けていると元気になるんだよ！　これは俺が着けて確認したから効果は間違いないよ！」
副官は、せめて家宝にしようとしたが、和也から軽い感じで普段から着けるように言われてしまった。
和也から言われては断れない、それに和也はいつ戻ってくるかもわからない。そう思った副官は涙目になりながらも、日替わりでネックレスを着けることを和也に約束するのだった。

❖ ❖ ❖

「よーし！　じゃあ出発だー。司令官さんー。頑張ってねー」
和也の号令に、一同が出発をはじめる。
整然と並ぶ軍勢に続いて、和也はホウちゃんに騎乗し、スラちゃん1号を頭の上に乗せながら進みはじめた。
「えっ⁉　お、おい！　和也殿が出発されるぞ！　見送りしなくていいのかよ」
和也が出発するのに気づいた司令官が、しつこいほどに追いかけながら攻撃をしてくる部下達に声をかける。
殺気だった部下達は和也達に別れの挨拶をしながらも、司令官を追いかけるのをやめない。
「和也様！　帰りには絶対に寄ってくださいよ！　そして司令官は動かないでくださいよ！」
「一太刀だけ！　ちょっと攻撃を受けるだけですから、一太刀浴びてくださいよ！」
「おい！　誰か補助魔法をかけろよ！　本気で当たらねえ」
「攻撃魔法は山牛に当たるから使うなよ！」
「当たり前だ！　あれ？　山牛も司令官を追いかけてないか？」

それらの攻撃を器用にかわしながら、司令官が大声で叫ぶ。
「一太刀受けたら怪我するわ！　うわぁ！　ちょっ！　なんでお前達も突撃してくるんだよ！」
「「「もー」」」
なぜか山牛も司令官に突撃していた。
司令官は山牛の猛攻を避けると、和也に向かって言う。
「和也様！　牧場のことは俺達に任せてください！　あと、魔王マリエール様によろしくお伝えください！　ここまでくれば反撃しても文句は言われないよな。覚悟しろよ、お前達」
「「「うわー。司令官がキレたー」」」
ついに、司令官が反撃をはじめた。
次々と吹っ飛んでいく砦の魔族達を眺めながら、和也達はゆっくりと魔王城に向かって行進する。
和也は、遠くで高笑いをしている司令官に向かって大声で言う。
「司令官さん、やりすぎに気をつけてねー。それにしてもみんないい人達だったねー。今度会うときはプレゼントを用意しとかないと」
スラちゃん1号は「そうですね。お子さんも産まれているでしょうから、子供服を用意しましょう。モイちゃんの糸も大量にありますからね。産着や子供用の服もたくさん作っておきますね」と和也の上で弾みながら答える。

何気ない会話のようだが、司令官・副官だけでなく魔王まで、胃が痛くなるような内容だった。
というのも、モイちゃんの糸こと「コイカの糸」は伝説の素材とされる物で、世界広しといえどそうそう存在しえないのだから。

6．そのまま出発するなんてありえなかった

「平和だねー。街道はきれいに整備されているし、襲われることはないし、休憩する場所も定期的にあるし」
和也はホウちゃんにもたれながら、のほほんとしている。
だが、だらーんとしているのは和也だけで、ほかの者達は周囲をしっかり警戒していた。
魔王城側からは出迎えや護衛の用意はなかった。砦の司令官から、街道をまっすぐに行けばよいと言われただけである。
魔王城への案内役として同行している、土の四天王マウントの娘であるルクアが事情を説明する。
「本来なら護衛は必要ですが、和也様の戦力を見て問題ないと判断されたのでしょうか。魔族は力がすべてですからね」

せっかく発言したのに、これまでの存在感のなさから「え？　いたの？」との視線を向けられたルクアは泣きそうになる。
気を取り直して、ルクアは和也に話しかける。
「和也様。この先しばらくは砦も街もありません。ちょっと行ったところに小さな集落がありますから、そちらで休憩しましょう。先触れを出しておきます」
「わかったー。その集落にはどれくらいの人がいるの？　近くに街とかなくて生活はできるのかな？　なにかプレゼントを用意したほうがいい？」
そう尋ねつつ、ホウちゃんの上で器用にだらだらとしている和也を見て、ルクアは笑みを浮かべる。
かなり危険な行動なのだが、ホウちゃんが落ちないように気を使っているのと、スラちゃん1号が触手を操って支えているのとで、和也が落ちることはなかった。
しばらく他愛のない話をしながら集落に向かう和也達だったが、先触れに出ていたルクアの部下が青い顔をして戻ってきた。
和也がいったい何事かと見ていると、部下はルクアに慌てた様子で言う。
「ほ、報告します！　この先の集落で疫病が流行っているとのことです。和也様一行はこの集落に

寄ることなく進んでください！」
「集落はどうするの？」
和也が心配して問うと、報告者に代わってルクアが答える。
ルクアの案は、案内役をセンカに譲って自分は砦に戻るというものだった。それで、その集落への救援物資を魔王城に依頼するらしい。
和也は、スラちゃん1号を抱き寄せてジッと見つめる。
スラちゃん1号は「大丈夫です、和也様。こんなこともあろうかと、救援物資は用意してありますから。病気は、私が診断して薬を作りますね。では、ルクアさん。集落に案内してください」と触手を動かした。
慌てたのはルクアである。
ルクアは、スラちゃん1号の優しさに感謝しながらも……魔王領にとって大切な要人である彼を集落に向かわすことはできないと反対した。
和也はルクアに向かって言う。
「ルクアさん。困ったときはお互い様だよ。俺はこれまでに困っているイーちゃんやネーちゃんを助けてきたし、モイちゃんやリザードマンさんや蜂さんともそんな感じで仲よくなってきたんだ。グラモの土竜（もぐら）一族なんて、借金に困って全員が無の森に引っ越してきたじゃん。俺はそういう人達

を助けてきたし、それはこれからも変わらないよ。あと、ルクアさんが今から砦に戻っても、救援が間に合わないかもしれないじゃん」
「和也様……ありがとうございます。ですが、スラちゃん1号さんが『無理ですね』と言われたらすぐに撤退してくださいませ。それと、和也様が集落に入るのは、ほかの者が入り終えた最後ですわよ。これは譲れませんわ！」
ルクアがそう主張すると、スラちゃん1号はルクアの頬をなでた。そして小さく頷き、和也の安全を最優先で考えていることを伝える。
それからスラちゃん1号は「では、私達だけで状況を確認してきます。和也様はホウちゃんから降りたらだめですからね」と伝え、集落に向かっていった。
残された和也の周りではキャンプが作られ、炊きだしの準備がはじまった。
ちびスラちゃん達が回復薬を作りだし、リザードマンやキラービー達はセンカの部下達と一緒に周辺の調査に向かう。
「ねえ、集落には行かないから、ホウちゃんから降りてもいいかな？　ご飯も食べたいし」
そう主張する和也に対し、ホウちゃんは「主（あるじ）！　私の背中はそれほど乗り心地が悪いでしょうか？　ご満足いただけるように全力を尽くしていたのですが」と落ち込んだように伝える。

そんなせめぎ合いが行われていたが……最終的には、和也がホウちゃんの背中で食事をすることになった。
「ホウちゃんの背中は乗り心地抜群だよ？　でも、地面に足を着けたいなーと思ってさ。ずっとホウちゃんに乗りっぱなしなのも申し訳ないしさ。それに、炊きだしのご飯も試食しないとだめじゃん？」
しかし、そのまま馬上で炊きだしの味見をすることになり、和也は味を調整する指示を出していく。
「もうちょっと味を薄くして煮込んでくれるかな。お肉は小さな団子にしてほしい。胃が弱って、食事が取れないかもしれないからね。それと、経口補水液も作っておこうかな。水と塩と砂糖の割合は……うん、こんな感じかな？」
和也はそんなふうにして、大量に物資を準備していった。
しばらくして、集落の調査に行っていたスラちゃん1号達がキャンプに戻ってきたときには、大量のスープと経口補水液が用意されていたのだった。

7．和也が集落にやって来た

「高熱が出ていて、お腹を下しているのかー。吐いたりはしてないの？　そっちは大丈夫なんだ。ふむふむ、じゃあ用意した経口補水液とスープは役立つかな。それで原因は――森の中に生えてたキノコを食べたの？　それって疫病じゃなくて食中毒じゃない？」
スラちゃん1号からの報告を聞いた和也は、どこから取りだしたのか、カルテのような物になにやら書き込んだ。
和也はペンを咥えてしばらく考え込むと、原因となったというキノコを手に取った。
「これがそうなの？　普通のキノコだよね？　スラちゃん1号がこのキノコを原因と判断したのはどうして？」
和也に問われ、スラちゃん1号は「私がこのキノコを取り込んだ際に、毒物の反応が出たからですよ」と触手を動かしながら軽い感じで答えた。
それを聞いて、和也は慌ててしまう。
彼は顔を真っ青にし、慌ててスラちゃん1号の身体をなで回しだした。

「なんでそんなに危ないことしたの!? いでよ！ 万能グルーミング！ ほら見せて。ここですかー？ それともこっちですか？ 早く悪いところを言いなさいー」
「ちょっ！ 和也様！ どこも悪くないですから！ 解析するために取り込んだだけです。ほら、安心してください。あなたのスラちゃん1号はこの通り元気ですよ。それよりも集落の人々が大変です。早く行きましょう」と身体を弾ませるスラちゃん1号。
「あまり危ないことをしないでよ。毒キノコを食べるなんて本当にやめてよね。よし、反省したのならOKだよ！ それじゃあスープ持った？ 経口補水液は準備万端？ うん！ では、これより和也部隊は救援に向かう。皆の者続けー、急ぐぞー。ホウちゃん全力だ！」
和也は、ホウちゃんを勢いよく走らせた。
すると、ホウちゃんは和也によいところを見せようとして——本当に全力を出してしまう。あっという間に、後続部隊をはるか彼方まで引き離してしまった。
スラちゃん1号が触手でホウちゃんを叩く。
「こら、なにをしているのです。和也様だけ急いでも意味がないでしょうが。もう少し考えなさい。和也様の言われる通りに動くだけではだめですよ」と、スラちゃん1号は溶解液をホウちゃんに引っかけていた。
「ひ、ひひーん。ひんひん」

「申し訳ございません、許してください」と伝えて、ホウちゃんは歩みを止める。後続部隊が追いつくのを待っている間、スラちゃん1号は和也にもお説教をはじめる。
「いいですか、和也様？ 集団行動は大事です。和也様が勝手に動かれたら、皆ついていかないといけなくなるしょう？ 和也様にはしっかりとしていてもらわないと困ります。もっと支配者としてどっしりと構えていてください」と、スラちゃん1号がちくちくやっていると——ようやく後続達が追いついてきた。
和也は、スラちゃん1号に必死に謝る。
「ごめんなさい！ もう突撃はしないから許してー」
和也に追いついた者達は、和也がスラちゃん1号に怒られているのを見て、なにが起きているのかわからずオロオロするしかなかった。
スラちゃん1号は一通り説教し終えるとため息を吐き、そして「次からは気をつけてくださいね」と触手を優しく動かした。
「許してくれるんだね。俺に注意をしてくれるスラちゃん1号は最高だよ」
和也はスラちゃん1号を抱き上げ、何度も頬ずりする。
スラちゃん1号は照れていたが、思いだしたように病人が待っていることを伝えた。その言葉に和也は急に慌てだし、みんなに向かって指示をする。

「イーちゃん達はスープを温め直して。ネーちゃん達はお湯とタオルの準備。それが終わったら、集落の人達の身体を拭こう。そしてモイちゃん印のパジャマを着せてあげよう。その後は、経口補水液を飲ませてあげて。俺とスラちゃん達はここに救護所を作る。ホウちゃんは森を駆け抜けて、襲いかかってきそうな魔物とかがいたら倒してきて」

和也の命令に応えると、皆は次々と動きだしていった。

集落にいた者すべてが食中毒になっていた。中には脱水症状を起こしている者もおり、苦しそうに呻いていた。

和也はふざけていたのを反省し、精力的に活動する。

経口補水液などのおかげで、集落の者達の表情に精気が戻る。生命力の強い魔族だからこそ耐えられたようだった。あと数日、和也達が来るのが遅れていれば手遅れになっていただろう。

身体を拭かれ、着替えさせられた者達がベースキャンプにやって来て、集落の長が和也に頭を下げた。

「救援、感謝いたします。慈悲深き尊きお方の名前をお伺いしても？　我らのような者を救ってくださり、感謝しております。ですが、我らに返せる物など――」

長は申し訳なさのあまり身体を小さくしていた。

弱肉強食が基本の魔族において、弱っていること自体が悪である。

魔王マリエールの治世ではその考えもいくらか弱まり、弱者救済も行われるようになったが、それほど浸透しているわけではない。

だからこそ、長としては感謝しつつも、どう恩を返せばいいのかわからない。集落の半数以上を奴隷として差しだせと言われても受け入れるしかないと考えていた。

しかし和也から返ってきた答えは、ありえないものだった。

「気にしなくていいよー。たまたま寄って、困っているのがわかっただけだから。それに、服はマリエールさんに用意しておいた普段着だけど、病人を救うために使ったとなれば許してくれると思うからねー。ねえ、スラちゃん1号もそう思うだろ？　困ったときはお互い様だよねー」

和也が笑顔で呟いた「マリエール」という言葉を聞いて、集落の長、そして近くで治療を受けていた者達が震える。

魔王マリエール――その名は歴代最強魔王として響き渡っているのだ。

「あ、あの、マリエール様とは、我らが主である魔王マリエール様のことでしょうか？」

集落の長が恐る恐る和也に確認する。マリエールの献上品であるという服を着せられ、彼らは生きた心地がしていない。

「そうだよー。これから魔王城に遊びに行くところなんだよ。それで、ちょっと休憩しようと来た

らさ、みんなが倒れててって話じゃん？　心配になって救援活動するよね！　でも軽い食中毒でよかったよ。経口補水液を飲んで、随分と元気になったみたいだから」
能天気にそう言う和也を見て、集落の者達は心の中でツッコむ。
（（いやいやいや！　魔王マリエール様のご友人だと！　そんなお方に助けてもらったのか⁉　あと、元気そうに見えるのは仰天してるだけだから！））
彼らの心の内に気づいていない和也は、スラちゃん1号に今後のことを話す。
「経口補水液は引き続き飲ませてあげて。それと、食べないと力が出ないし回復もしないから、用意したスープをさっそく飲ませてあげよう。スープ皿とスプーンの用意もお願いしていいかな？」
スラちゃん1号は「ええ。もちろんです。この人数でしたら特に問題なく用意できますよ。では、ちびスラちゃん達はスープを入れる皿を持って並びなさい。そして集落の方々に渡していくように。ちょっと調味料を足しますね」と上下に弾むと、ちびスラちゃん達を連れて調理場に向かっていった。
スラちゃん1号達が一列になって進んでいく姿はとても可愛らしく、和也はそれを楽しそうに眺めていた。
しばらくして和也はなにかを思いついたのか、イーちゃんを呼び寄せ、その耳元に「お風呂」とささやく。

すると、イーちゃんは大きく頷いて近くにいた犬獣人や猫獣人達、それとリザードマン達も連れて集落の外れに向かった。
「……そういえばホウちゃんは帰ってこないね。どこまで行ったんだろう？　ん？　どうかしたの？」
和也が遠くに視線を向けてホウちゃんを思いだしていると、集落の長が話しかけてくる。
「あ、あの。高貴なお方様――え？『和也と呼んでほしい』？　では、和也様。それで私達はなにをすればよろしいのでしょうか？」
長は、和也の配下達だけに働かせるわけにはいかないとのことで声をかけたらしい。だが、和也はその申し出を断り、病み上がりなので休んでおくようにと伝えた。
それから和也は、荷馬車に積んでいたモイちゃん糸で作られた枕を取りだす。
「とりあえず枕はたくさんあるから、これを使ってよ」
「い、いや。和也様。これ以上は――」
荷馬車の一つは枕で埋め尽くされていた。なので、集落の者達に一人一個を渡しても半分以上は残っている。
枕だけでは足りないと感じた和也は、少し離れた場所で調理をしているスラちゃん1号に声をかける。

「いいからいいから。そっか！　お布団も必要だよね！　ねースラちゃん1号。お布団を作れるかなー？」
スラちゃん1号は「お布団ですか？　確かに食中毒で苦しんでいる者も多いでしょうから、きれいなお布団は必要ですね。うーん、どうしましょうか？」と考え込む。
それからスラちゃん1号は「そうだ、スラちゃん2号。森の中で、使えそうな物がないか調べてきてもらえます？　それと、ホウちゃんを見かけたら呼んできてください。和也様にお願いされたからといって張りきりすぎです。さっきから何度も帰ってくるように伝えているのですが……」とスラちゃん2号に声をかけた。
スラちゃん2号は「了解。ついでに薬草や食べられそうな物がないか、調べてくるね」と、近くにいたちびスラちゃん二匹を連れて森の中に入っていった。
長は、テキパキと動く和也達を眺めながら唖然としていた。
和也から「病人はゆっくりしなさい」と言われた集落の者達が救援所に移動していく。そこで待っていた若者が気楽な感じで、長に話しかける。
「長、和也様のおかげで助かりましたね！」
「ああそうだな。しかし、我らが受けた恩をどうやって和也様に返せばいい？　この服だけでも、我らの財産をなげうっても買えると思うか？」

集落の長はそう口にすると、長いため息を吐く。
笑顔だった若者は事の深刻さにようやく気づき、青い顔になった。そして改めて自分の着ている服を見て震えだす。
「ど、どうしましょう……」
「今はなにも返せる物はない。和也様のお言葉通りに大人しく待っているとしよう」
さすがに言いすぎたと感じた長は、若者の肩を叩くと微笑みかけ、ちびスラちゃんから手渡されたスープをゆっくりと飲むのだった。

スラちゃん2号がホウちゃんの上に乗り、触手をペシペシとしている。
「ひ、ひひーん……」
「ほら。ホウちゃん。怒られるのは確定なのですから、諦めてスラちゃん1号に謝ってきなさいな」とスラちゃん2号が伝えると、ホウちゃんは怯えた表情ながらも動きだした。
ホウちゃんは和也を見つけると、慌てて駆け寄った。
「ひひーん！　ひんひん！」
「え？　どうしたのホウちゃん？　おお！　こっちに来そうになっていた熊の魔物を倒したの？　えらいじゃん！　それにしてもすごい汗だね。そんなに強い敵だったの？　いでよ！　万能グルー

ミング！　よく頑張ったねー。褒めてしんぜよう。うりゃうりゃ」
怒られると思って冷や汗を大量にかいていたホウちゃんを、和也は万能グルーミングでタオルを作りだして拭いていく。
ホウちゃんは嬉しそうにしていたが――そんな楽しい時間は長く続かなかった。
背後に雷をまとったスラちゃん1号が近づいてきたのである。
「ねえ。ホウちゃん？　どうして和也様からグルーミングを受けているのです？　早く帰ってきなさいと私は言いましたよね？　私の念話は通じていませんでしたか？　なぜ目をそらしているのです？　ねえ、こっちを見なさいよホウちゃん」と耳元でささやくスラちゃん1号。
ホウちゃんは恐怖のあまり白目になると、そのまま泡を噴いて気絶してしまった。

8．ちょっとした喜劇

和也達の救援活動は順調に進み、三日ほどで全員の症状は改善した。
平行して事情聴取が行われたが、なにもわからなかった。集落の者達から聞かされたのは、いつも食べているキノコを食べただけとのことだった。

スラちゃん2号達の二度目の探索で、食中毒の原因となったキノコが大量に集められた。その後、キノコを乾燥させたり水に漬けたりなど様々な状態で保存されていく。
「マリエールさんのところに持っていくの？」
「ええ。ちゃんとした調査が必要ですからね。このキノコを解析してもらおうかと……」とスラちゃん1号が触手を動かす。

❖　❖　❖

後に、そのキノコは魔王城にある研究機関によって調査された。
変異種であるキノコの魔物が死に、毒をまき散らしていたらしい。それで、森全体のキノコに毒が広がったようだ。
偶然和也が通り、また集落の者達がキノコを普段から食べていたために気づけたが、どちらかのタイミングが合わずに放置されていれば、被害はさらに甚大になっていただろう。
さらに後日、研究結果の報告を受けたマリエールは、問題を未然に防いだ和也への感謝の気持ちとして、集落と近くにあった森を浄化したうえで集落ごと和也に譲渡するのであった。

❖ ❖ ❖

「みんな元気になったのなら、お肉でお祝いパーティーをしないとねー」
和也は全快した魔族達を見て、嬉しそうに言う。「これ以上の恩は返せないからやめて！」と目線で懇願する集落の長を無視して。
一方、そろそろ肉を食べたいと思っていた若者達は大喜びしていた。そんな能天気な若者達に触発され、魔族の老人達も開き直っていく。
「はっはっは。若い者は元気でいいのー」
「そうじゃな。これだけの恩を受けて、どうやって返そうかの？」
「こうなったら、儂らも若い者に負けんように開き直るか！」
「ええのう。そうしようじゃないか！」
そこへ、集落の長が老人達に声をかける。
「よーし。まずはひと風呂浴びてこよう」
「「「おお！」」」
老人達はタオルと手に取ると、集落の外れに作られたという風呂場へ、のんびり向かっていくのだった。

お風呂は、村人の救援中に和也がイーちゃん達にさりげなく頼んでおいた案件で、かなり巨大な浴槽ができあがっていた。集落に棲む魔族五十名全員が入れる広さがあり、男女もキッチリと分けられている。共有の憩いの場には、簡易の食堂まで作られていた。
風呂場にやって来た老人達は、なぜか先回りして入浴まで済ませていた和也と出会った。和也は憩いの場でくつろいでいた。
「俺はコーヒー牛乳を飲むー。スラちゃん1号はなににする？　え？　水でいいの？　一緒にコーヒー牛乳を飲もうよ！」
「和也様！」
「おお、皆もお風呂に来たの？　ゆっくりしていってねー。ほら、スラちゃん1号、俺の真似をしてグッと一気にいこう。腰に手を当てて飲むのがマナーなんだよー」
和也は、近くにいたスラちゃん1号にコーヒー牛乳を飲ませる。
すると、スラちゃん1号の水色の身体はコーヒー牛乳色に変わっていった。
和也はそんな様子を楽しそうに眺めると、腰に手を当ててコーヒー牛乳を一気飲みし、満足げな表情を浮かべた。

なぜかフラフラとしているスラちゃん1号を見て、和也は不思議そうに問いかける。
「あれ？　どうかしたの？」
スラちゃん1号は「気にしないでください、気分がよいだけですから。コーヒー牛乳は美味しいですねー。もっともらっていいですか？　ひっく！　ちょっとほかの者にも勧めてきますね。イーちゃんじゃないですか？　あれあれ？　イーちゃんが三人もいますよ？　ふふっ。不思議ですね」と左右に揺れながらイーちゃんに近づくと触手で拘束した。
「きゃう！　きゃうきゃう！」
イーちゃんは「ちょっとやめて！　無理に飲ませないで」と抵抗していたが……
スラちゃん1号は強引に、イーちゃんに三本のコーヒー牛乳を飲ませていく。お酒を強要する悪い酔っ払いみたいな行動だったが、飲ませている物はコーヒー牛乳である。
そして、喜劇が生まれる。
「にゃー！　にゃー！」
「や、やめてくださいませ！　スラちゃん1号さん！　そんなに一気に飲め――げほっげほっ」
「きしゃー！」
「お、おい。逃げたほうが……ぎゃー」
次々と捕まっていく、犬獣人、猫獣人達。スラちゃん1号は触手を縦横無尽に動かし、コーヒー

牛乳を次々と飲ませていった。
そこへ、集落の若者達がやって来た。彼らは憩いの場での騒動を目の当たりにして一瞬硬直していたが、和也がいるのを見て安心する。
だが、スラちゃん1号に一人の若者が捕まってしまった。
「なにやら楽しそうです――なんですか？　スラちゃん1号様。え、飲めと？　一気に飲むのがしきたり？」
彼はコーヒー牛乳を押しつけられながら話していたが、そのまま触手で口を押さえられ、無理やり飲まされる。
最初は軽い感じで飲んでいたが、五本目ともなると青い顔になった。
「もう飲めま……許し……そうだ！　コーヒー牛乳を飲みたそうなやつがこっちを見ていますよ！」
「なっ！　俺を売るなよ！　い、いや、俺は風呂上がりに飲みたいので遠慮し……なっ！　いつの間に捕まって……嫌！　ちょっ！　待って！　話せばわかりますよ！」
逃げようとしたその青年が捕まると、若者は離脱を図った。そんな混沌(こんとん)とした状況を微笑ましく眺めていた和也だったが、やっと気づく。
「あれ？　スラちゃん1号ってコーヒー牛乳で酔っ払ってる？」
一同が「今さらかよ！」との視線を投げる。

立ち読みサンプル
はここまで

だが、和也にツッコミを入れようとすると、スラちゃん1号に捕まるため、彼らは無言のまま静かに風呂場から逃げだすのだった。
その後もスラちゃん1号に捕まった面々は、コーヒー牛乳を飲まされ続けるのだった。

9．集落がリゾート地になる？

和也はコーヒー牛乳をクピクピと飲みながら、憩いの場を眺めていた。
ありえない光景が広がっている。
そこには、イーちゃん、ネーちゃん、ルクア、リザードマン達、集落の長、若者達が死屍累々(ししるいるい)となって積み上げられていた。
スラちゃん1号のせいで、皆コーヒー牛乳を飲みすぎて白目を剥いているのだ。
酔いから醒めたスラちゃん1号が「……和也様。コーヒー牛乳は今後飲みません。スラちゃん一族と分体であるちびスラちゃん達にも飲ませないようにします」と恥ずかしそうにしている。
「気にしなくていいよー。酔っぱらったスラちゃん1号は面白かったからねー。ねえ、みんなもそう思うだろ？」